

司書課程科目履修学生によるWeb情報資源評価：  
評価における注目点と影響要因  
**Evaluation of Web Resources by Undergraduate  
Students in Courses for Certified Librarians  
: Focuses and Effect Factors**

櫻木 貴子\*

*Takako SAKURAGI*

**Abstract**

This research was designed to figure criteria and weighting items for evaluating of Web resources that reflected characteristics of undergraduate students.

Undergraduate juniors and seniors in courses for certified librarians of universities of Aichi Shukutoku University were examined by questionnaire surveys in 2005 and 2006. The questionnaires consisted of 3 parts ; 1) focus points in Web resources evaluation, 2) using experiences of personal computers (PC) and Internet, 3) critical thinking behaviors.

As a result, participants tended to evaluate with the focus on “usefulness for writhing assignments”, e.g., they unnoticed evaluation items of authority ; they preferred Web resources fitted themselves in theme, level, depth, freshness, and ease of watching and using.

In the survey of 2006, participants' using experiences of PC and Internet, and their critical thinking behaviors affected evaluation tendencies.

---

\* 愛知淑徳大学文学部

Faculty of Literature, Aichi Shukutoku University

JOURNAL OF LIBRARY AND INFORMATION SCIENCE. Vol. 20, p. 71–82 (2006)

## 1. 研究目的

学術情報の探索行動は、研究者が自分の取り組んでいる研究課題に関連する情報の収集を行うという明確な情報ニーズから起こり、研究課題や領域に関する専門的な知識を利用して行われる。このように明確な情報ニーズを持ち、保有する専門知識が豊富な研究者の情報探索過程に関する研究は既に数多く行われている。

しかし、自らの研究課題が明確ではない学部学生による情報探索過程に関しては、未だ研究が少ない。学部学生は、所属する学科の専門領域に対して初学者である。そのため、研究者や大学院生のような専門知識を持たない。したがって、明確な情報ニーズを持つことが困難な状態である。

明確ではない情報ニーズは、探索質問の曖昧さを発生させる。探索質問は探索過程で収集した情報の評価を行うための探索者自身の基準となるものであり、その曖昧さは評価に対して大きな影響を及ぼす。情報資源の評価と選択は、その情報資源からもたらされる情報に基づくその後の理論の組み立てに大きく影響する重要な要素である。したがって本研究では、情報探索過程を構成する要素の中から、情報資源の評価を中心として考える。

また、学術情報をWeb情報資源からも収集することができるようになり、学部学生による学術情報探索行動が変化していると考えられる。現在Web情報資源は、速報性と情報の多様性を備えたメディアとして広く普及している。しかし、従来の情報資源のように編集や査読等によってその収集・利用以前に第三者（機関）によって評価が行われているものではない。一方で、ボランティアにより運営されるWikipediaの記述内容がEncyclopaedia Britannicaと同程度の正確性を持つという報告[1]の存在や（これに対してはEB側からの反論もある[2]）、それらが参考図書のように図書館のレファレンスサービスにおいて使用される事例もある。

このようにWeb情報資源は、一概に不正確なものとして判断することはできないが、未評価の情報資源が大量に含まれた玉石混淆の状態にあることは否めない。さらに、その利用が学部学生の思考の独創性とレポートの質の下降を招く原因となっているとする研究 [3] や、その収集・閲覧に必要なコンピュータの利用自体が創造性の低下をもたらしていることを示した研究[4]もある。

さらに、2002年に行った実験[5]において、学部学生の情報探索過程におけるWeb情報資源評価の欠落、および情報要求の希薄な者の情報検索に関する知識の欠乏と修得への不熱心さが確認された。この実験結果において注目すべきは、サーチエンジンを利用して事実情報の検索を行った学部学生は、収集したWeb情報資源に対して何らの評価も行わなかった点である。つまり、検索結果を他の情報資源を用いて検証せず、また、Web情報資源作成者の適切性、データの適時性等を考慮することなく、課題に対する回答として提出していたことである。この点に関しては、Grimesらによる研究[6]を裏付ける結果となった。

本研究では、これらの研究を踏まえ、学部学生に対して、より効果的な情報検索技術の提供を行うための一手段として、学生の視点を反映させたWeb情報資源評価項目および項目への重み付けを検討することを目的とする。そのため、学部学生の情報資源の評価行動の背景となる諸要因を明確することも合わせて目的とする。

## 2. 調査

### 2.1 調査目的

本調査は、学部学生によって行われるWeb情報資源評価における注目項目および非注目項目を明確にすることを目的とする。その上で、評価行動に対して影響を与えられている要因[7][8]である、「パーソナル・コンピュータ（以後、PC）、インターネット（以後、IN）、

## 司書課程科目履修学生によるWeb情報資源評価：評価における注目点と影響要因

サーチエンジン（以後、SE）利用経験・頻度」および「批判的思考」を取り上げる。学部学生の評価行動に対する「経験」と“情報を適切な取捨選択と活用のための、物事を客観的に、多角的・多面的に検討し、適切な基準に基づき判断する”[9]とされている「批判的思考」の傾向、およびその影響を把握するためである。

### 2.2 仮説

伊藤と櫻木による実験[5]およびFitzgeraldによる研究[8]を踏まえ、被験者が異なる場合にも同様の評価行動が示されるかを検証するため、次の二つの仮説を設定した。

1) PCやインターネット、サーチエンジンの利用経験が豊富である、あるいは頻度の高い被験者もWeb情報資源を評価しない（学習していない）

2) 批判的思考を持つ被験者も、Web情報資源を評価しない（学習していない）

### 2.3 調査方法

・調査時期・時間：

調査は2度実施した。2005年7月15日および8月4日実施の調査を「2005年度調査」、2006年7月18日および同月20日実施の調査を「2006年度調査」とする。実施時間は両調査とも20分であった。

・手法：質問紙法（無記名）

質問紙は下記の3部分で構成されている。

a) 「PC, IN, SE利用経験・頻度」に関する設問および「問題解決に利用するメディアの優先順位」：6問（2005年度調査）および8問（2006年度調査）（表1参照）

表1 パーソナル・コンピュータ、インターネットおよびサーチエンジン利用経験質問項目

質問項目群	質問項目	質問項目の概要	
PC 利用経験	PC利用年数	パーソナルコンピュータの利用年数に関する項目	
	文書・図表作成経験	MS Word等を使用して文章や図表を作成した経験の有無に関する項目	
	Webサイト作成経験	自分のWebサイトを作成した経験の有無に関する項目 (授業・課題における作成、ブログやソーシャル・ネットワーク・サービス(SNS)サイトの利用を除く)	
	プログラム作成経験	自分でコンピュータプログラムを作成した経験の有無に関する項目 (マクロを含む)	
	PCアSEMBル経験	自分でコンピュータを組み上げた経験の有無に関する項目 (購入時の設定やメモリ増設、ネットワーク接続設定等は除く)	
インターネット 利用経験	インターネット利用年数	インターネット利用年数に関する項目	
	インターネット利用時間	適当たりのインターネット利用時間に関する項目	
	インターネット 利用頻度	課題作成目的	各目的別のインターネット利用頻度に関する項目(3段階リカート) (1:よく利用する, 2:少し利用する, 3:あまり利用しない)
		会話目的	
		趣味目的	
サーチエンジン 利用頻度	課題作成目的	各目的別のサーチエンジン利用頻度に関する項目(3段階リカート) (1:よく利用する, 2:少し利用する, 3:あまり利用しない)	
	趣味目的		

b) 「批判的思考」に関する設問  
 (4段階リカート法: 「そうである: 1」「どちらかといえばそうである: 2」「どちらかといえばそうではない: 3」「そうではない: 4」): 33問 (表2参照)

この設問は、平山と楠見[9]による「批判的思考態度尺度」を利用した。当該尺度は「客観性」「探求心」「論理的思考への自覚」「証拠の重視」の4因子から構成されているものである。

表2 批判的思考態度尺度因子および質問項目

因子名	質問項目
客観性(7項目)	いつも偏りのない判断をしようとする
	物事を見る時に自分の立場からしか見ない(反転項目)
	物事を決める時には、客観的な態度を心がける
	一つ二つの立場だけではなく、できるだけ多くの立場から考えようとする
	自分が無意識のうちに偏った見方をしていないか振り返りにしている
	自分の意見について話し合う時には、私は中立の立場ではいられない(反転項目)
	たとえ意見が合わない人の話にも耳を傾ける
探求心(10項目)	いろいろな考え方の人と接して多くのことを学びたい
	生涯にわたり新しいことを学び続けたいと思う
	新しいものにチャレンジするのが好きである
	様々な文化について学びたいと思う
	外国人がどのように考えるかを勉強することは、意義のあることだと思う
	自分とは違う考え方の人に興味を持つ
	どんな話題に対しても、もっと知りたいと思う
	役に立つかわからないことでも、できる限り多くのことを学びたい
	自分とは異なった考えの人と議論するのは面白い
	分からないことがあると質問したくなる
論理的思考への自覚(13項目)	複雑な問題について順序立てて考えることが得意だ
	考えをまとめることが得意だ
	物事を正確に考えることに自身がある
	誰もが納得できるような説明をすることができる
	何か複雑な問題を考えると、混乱してしまう(反転項目)
	公平な見方をするので、私は仲間から判断を任される
	何か問題に取り組む時は、しっかりと集中することができる
	一筋縄ではいかないような難しい問題に対しても取り組み続けることができる
	道筋を立てて物事を考える
	私の欠点は気が散りやすいことだ(反転項目)
	物事を考える時、他の案について考える余裕がない(反転項目)
	注意深く物事を調べることができる
建設的な提案をすることができる	
証拠の重視(3項目)	結論を下す場合には、確たる証拠の有無にこだわる
	判断を下す際には、できるだけ多くの事実や証拠を調べる
	何事も、少しも疑わずに信じ込んだりはしない

## 司書課程科目履修学生によるWeb情報資源評価：評価における注目点と影響要因

c) 「Web情報資源評価項目」における注目点に関する設問（3段階リカート法：「気にした：1」「少し気にした：2」「気にしなかった（知らなかった）：3」）：95問（表3参照）

この設問は、櫻木[10]による評価項目に、四谷[11][12]が挙げた評価項目の中から「主観的要素」に含まれる項目を加え、項目群の修正を行い再構成したものを使用し、各項目に3段階

リカート法で注目の度合いを尋ねたものである。当該評価項目は「正確性」「目的」「オーソリティ」「内容」「最新・安定性」「アクセス可能性」「主観」の7項目群から構成されている。評価項目に加えて、実験者が提示した評価項目以外の注目点を被験者が想起した場合のための自由記述欄を設けた。

表3 Web情報資源評価項目

評価項目群	質問項目数 (大項目数:詳細項目数)	評価項目の概要
正確性	21 (15:6)	掲載情報の正確性に対する影響要因に関する項目群 (掲載情報の情報源, 広告による影響, 掲載図表の明確さ, 偏向や誤植の有無等)
目的	6 (4:2)	サイト/ページの目的と掲載情報との関連性に関する項目群 (サイトの目的を明示しているか, 文章/語彙への影響等)
オーソリティ	23 (9:14)	サイト/ページ, 掲載情報の責任および評価に関する項目群 (作成者/機関の連絡先や専門性を明示しているか, 第三者評価の有無等)
内容	10 (10:0)	掲載情報の内容に関する項目群 (扱われるテーマおよびその深度・範囲・独創性, 利用対象者, 事前知識の必要性等)
最新性・安定性	9 (9:0)	サイト/ページ, 掲載情報の新しさおよび整備状態に関する項目群 (サイト/ページの作成日や最終更新日を明示しているか, 掲載情報の陳腐化の有無等)
アクセス可能性	20 (20:0)	サイト/ページ, 掲載情報の利用しやすさに関する項目群 (画面の見やすさ, 利用登録/料金の必要性, サイト内検索の有無, 多言語版の有無等)
主観	6 (6:0)	被験者の主観に基づく評価項目群 (サイト/ページのデザインや画像, 文体を気に入ったか, 役立つ情報が得られたか等)
質問項目数 合計	95	

### ・被験者：

被験者は愛知淑徳大学所属の司書課程科目履修者である学部3年生および4年生（2005年度調査：62名，2006年度調査：69名）。被験者の所属学部は文学部，現代社会学部，コミュニケーション学部，ビジネス学部，文化創造学部であった。調査以前に情報検索演習科目を履修し，その授業内でWeb情報資源の評価に関する指導を受けていた。そのため，調査に関する事前説明において，被験者に対しては，当該演習科目における課題作成を通じて行ったWeb情報資

源へのアクセスや選択，利用時の経験を想起しながら回答するように案内した。

## 3. 調査結果

### 3.1 分析方法

無記入の回答項目が存在した質問紙を除外した結果，有効回答数は2005年度調査が50件，2006年度調査が58件であった。

これらの回答から「Web情報資源評価項目」項目別，「PC，IN，SE利用経験・頻度」項目別，「批判的思考」因子別に被験者毎の平均値を算

出した。その値を用いて、「Web情報資源評価項目」と「PC, IN, SE利用経験・頻度」、および「Web情報資源評価項目」と「批判的思考」間の影響関係について相関係数を用いて分析した。

分析に先立ち、棄却限界法（危険率0.05）による検定を行い、棄却データを含む回答を除外し、38件（2005年度調査）および40件（2006年度調査）のデータを分析対象とした。

### 3.2 Web情報資源の使用頻度

分析対象となった被験者は、課題作成や趣味の目的を問わず、問題解決に利用するツールとしてWeb情報資源を選択していた（表4参照）。したがって、彼らがWeb情報資源は非常に身近で最も使用頻度の高い探索ツールとして認識していることがわかった。

表4 問題解決に利用するツールの優先順位（探索目的別）

（課題作成目的）

(N=40)

2006年度調査	2番目に参考にするツール				
最初に参考にするツール	印刷体	身近な人	図書館員	Web情報資源	その他
印刷体	-	0	0	4	0
身近な人	0	-	0	2	0
図書館員	0	0	-	1	0
Web情報資源	25	5	1	-	1
その他	0	0	0	1	-

※ その他の例：電子辞書, データベース

(N=38)

2005年度調査	2番目に参考にするツール				
最初に参考にするツール	印刷体	身近な人	図書館員	Web情報資源	その他
印刷体	-	0	0	3	0
身近な人	0	-	0	2	0
図書館員	0	0	-	0	0
Web情報資源	29	3	0	-	0
その他	0	0	0	1	-

※ その他の例：電子辞書, テレビ, データベース

（趣味利用目的）

(N=40)

2006年度調査	2番目に参考にするツール				
最初に参考にするツール	印刷体	身近な人	図書館員	Web情報資源	その他
印刷体	-	0	0	0	0
身近な人	2	-	0	5	0
図書館員	0	0	-	0	0
Web情報資源	10	21	0	-	0
その他	0	1	0	0	-

※ Web情報資源のみ利用：1名

※ その他の例：電子辞書

(N=38)

2005年度調査	2番目に参考にするツール				
最初に参考にするツール	印刷体	身近な人	図書館員	Web情報資源	その他
印刷体	-	0	0	1	0
身近な人	3	-	0	5	0
図書館員	0	0	-	0	0
Web情報資源	14	14	0	-	0
その他	0	1	0	0	-

※ その他の例：テレビ, ラジオ, チラシ, 身近ではないけれど詳しい人

### 3.3 Web情報資源の選択時における注目点・非注目点

表5は、どの評価項目群が注目されているか、あるいは注目されていないかを明らかにするために示したものである。表5は、次の3つの部分から構成されている。

1) 回答された選択肢の数が被験者の50%以上に達した評価項目の数を回答選択肢別に挙げた部分

2) 組み合わせた回答選択肢の数が被験者の90%以上に達した評価項目の数を評価項目群別に挙げた部分（「気にした：1」と「少し気にした：2」（表中の1+2）の組み合わせを「注目されている」, 「少し気にした：2」と「気にしなかった／知らなかった：3」（表中の2+3）の組み合わせを「注目されていない」と判断した）

3) 各評価項目群の全回答選択肢における最頻出の回答選択肢を挙げた部分

司書課程科目履修学生によるWeb情報資源評価：評価における注目点と影響要因

その結果、2005年度調査、2006年度調査とも次に挙げるような傾向が明らかになった。

1) 「新しさ」および「利用しやすさ」を重視したWeb情報資源の選択が行われていた

「最新性・安定性」の評価項目群における「最終更新日明示の有無」や、「正確性」および「アクセス可能性」の評価項目群における「掲載図表の読みやすさ」や「画面の見やすさ」、「利用しやすさ」、「登録や料金発生の有無」等の「利用しやすさ」に関連する項目が注目されていた。一方で、「広告の影響の有無」や「特定ユーザへの配慮（低スペックPCユーザやナローバンドユーザ、障害者等）の有無」等、利用しやすさに直接的な関連していない項目は注目されていなかった。

2) 「オーソリティ」に関する評価項目が特に注目されていなかった（表5参照）

「オーソリティ」の評価項目23項目のうち、「少し気にした：2」と「気にしなかった（知らなかった）：3」を選択した被験者の割合が90%以上の項目には、「サイト／ページ作成者の保持する資格」や「サイト／ページ作成者とそれを支援する機関との関係」、「第三者の評価

者が存在するか」等が含まれていた。図書や雑誌論文等の伝統的なメディアの評価と同様に「作成者（作成機関）が誰か（どこか）」については選択時に注目されたが、当該情報資源が利用に適するかを判断するための「作成者の専門性」や「サイトの評判」等に対してまでは注目されなかった。

3) Web情報資源の内容のレベルや深度を推し量るための評価項目が注目されていた

「内容」に関する評価項目群においては、「気にした：1」と「少し気にした：2」を選択した被験者の割合が90%以上の項目に、Web情報資源で扱われるテーマやそのレベル、深度を推し量るための評価項目が含まれていた。さらに、2006年度調査においてはWeb情報資源の利用対象者に合わせた内容かどうかについても比較的高い割合が示された。

4) 「自分に役立つか」が最重視されていた

「主観」の評価項目群における「自分に役立つ情報が得られたか」という項目への注目度が、全評価項目中で最も高かった（「気にした：1」を選択肢被験者の割合は、2005年度調査で84.2%、2006年度調査で82.5%）。

表5 学部学生のWeb情報資源の選択における注目点・非注目点の傾向

2006年度調査	50%以上の項目数 (大項目数:詳細項目数)			90%以上の 項目組み合わせ数		最頻出 選択肢
	1 (N/L/L/L)	2 (P/L/N/L/L)	3 (N/L/L/L/L/L /N/L/L/L/L)	1+2	2+3	
正確性 21項目(15:6)	3 (3:0)	8 (6:2)	3 (3:0)	6	5	2
目的 6項目(4:2)	0 (0:0)	5 (3:2)	0 (0:0)	2	0	2
オーソリティ 23項目(9:14)	1 (0:1)	4 (3:1)	11 (4:7)	2	9	3
内容 10項目(10:0)	3 (3:-)	4 (4:-)	0 (0:-)	4	1	2
最新性・安定性 9項目(9:0)	2 (2:-)	2 (2:-)	2 (2:-)	5	4	2
アクセス可能性 20項目(20:0)	3 (3:-)	5 (5:-)	4 (4:-)	5	4	2
主観 6項目(6:0)	2 (2:-)	1 (1:-)	0 (0:-)	1	0	1

2005年度調査	50%以上の項目数 (大項目数:詳細項目数)			90%以上の 項目組み合わせ数		最頻出 選択肢
	1 (N/L/L/L)	2 (P/L/N/L/L)	3 (N/L/L/L/L/L /N/L/L/L/L)	1+2	2+3	
正確性 21項目(15:6)	5 (4:1)	3 (2:1)	7 (4:3)	2	5	3
目的 6項目(4:2)	0 (0:0)	3 (2:1)	0 (0:0)	0	0	2
オーソリティ 23項目(9:14)	3 (2:1)	0 (0:0)	14 (5:9)	1	5	3
内容 10項目(10:0)	3 (3:-)	2 (2:-)	1 (1:-)	3	1	2
最新性・安定性 9項目(9:0)	1 (1:-)	1 (1:-)	4 (4:-)	1	2	3
アクセス可能性 20項目(20:0)	4 (4:-)	5 (2:-)	8 (8:-)	4	6	3
主観 6項目(6:0)	2 (2:-)	0 (0:-)	1 (1:-)	1	0	1



3.4 Web情報資源評価項目群とPC, インターネット, サーチエンジン利用経験および頻度間の相関(表6参照)

表6は、Web情報資源評価項目とPCやインターネット, サーチエンジンの利用経験および頻度との関係を見るためのものである。

最初に、Web情報資源評価に関する質問に対して被験者の回答した選択肢を「気にした」を1に、「少し気にした」を2に、「気にしなかつ

た(知らなかった)」を3にそれぞれ数値化し、被験者毎に選択肢の平均値を算出した。平均値が1に近い程「多くの評価項目に注目している」、つまり「Web情報資源評価を行う」ことを表している。その後、大項目の部分抽出し、各被験者のPC等の利用経験および頻度間と相関係数に算出して分析したところ、次に挙げるような結果が明らかになった。

表6 Web情報資源評価項目群とPC, IN, SE利用経験および頻度間の相関

質問項目群		質問項目	評価項目(大項目全平均)	
			2006年度	2005年度
PC 利用経験	PC利用年数		0.0435	-
	Webサイト作成経験		-0.3631	-
	プログラム作成経験		-0.3912	-
インターネット 利用経験	インターネット利用年数		-0.3526	-0.3235
	インターネット利用時間		0.4206	-0.0206
	インターネット 利用頻度	インターネット 課題作成目的	-0.6327	0.5532
		インターネット 会話目的	0.3634	0.2690
		インターネット 趣味目的	0.2071	0.3175
	サーチエンジン 利用頻度	サーチエンジン 課題作成目的	-0.6327	0.1891
サーチエンジン 趣味目的		0.2071	0.6512	

1) 経験豊かな被験者がWeb情報資源評価を行わない可能性が存在した

Web情報資源評価項目群に対して「Webサイト作成経験(2006年度調査)」や「プログラム作成経験(2006年度調査)」「インターネット利用歴」に弱い負の相関、「インターネット利用時間(2006年度調査)」が弱い正の相関を示した。このことから、PCの利用に慣れていたり、インターネットを継続的に恒常的に利用したりする被験者がWeb情報資源の評価を行っていない傾向を持つことが明らかになった。

2) 目的別のインターネットおよびサーチエンジンの利用頻度が影響を及ぼす可能性が存在した

Web情報資源評価項目群に対して「課題作成目的のインターネット利用頻度」が2005年度調査において正の相関を、2006年度調査において負の相関を示した。さらに、2006年度調査においては「課題作成目的のサーチエンジン利用頻度」も負の相関を示した。これらのことから、課題作成という利用目的自体が評価行動に影響を及ぼす可能性が示された。



## 司書課程科目履修学生によるWeb情報資源評価：評価における注目点と影響要因

また、「会話目的のインターネット利用頻度(2006年度調査)」と「趣味目的のインターネット利用頻度(2005年度調査)」において弱い正の相関、「趣味目的のサーチエンジン利用頻度(2005年度調査)」で正の相関が示され、娯楽的要素の強い目的での利用が多い被験者がWeb情報資源の評価を行っていない傾向が明らかになった。

### 3.4 Web情報資源評価項目群と批判的思考態度間の相関(表7参照)

表7は、Web情報資源評価項目と批判的思考態度との関係を見るためのものである。

まず、批判的思考態度尺度に関する質問に対して被験者が回答した選択肢を「そうである」

を1に、「どちらかといえばそうである」を2に、「どちらかといえばそうではない」を3に、「そうではない」を4にそれぞれ数値化し、被験者毎に選択肢の平均値を算出した。平均値が1に近い程「多くの批判的思考態度尺度因子を肯定する回答をしている」、つまり「批判的思考に基づいた態度を示しやすい」ことを表している。その後、Web情報資源評価項目群における大項目の部分の被験者別平均値と相関係数に算出して分析したところ、特に2006年度調査においては、多くの項目間に正の相関が示された。また、Web情報資源評価全項目と批判的思考態度尺度全因子の被験者別平均間でも正の相関が示された( $r = 0.6927$ )。したがって、Web情報資源評価に対して批判的思考が影響を及ぼす可能性が明らかになった。

表7 Web情報資源評価項目群と批判的思考態度間の相関

2006年度調査	批判的思考態度尺度因子			
	客観性	探究心	論理的思考	証拠の重視
正確性	0.6023	0.1037	0.2459	0.3707
目的	0.5134	0.3269	0.2885	0.2091
オーソリティ	0.5612	0.2002	0.3153	0.6504
内容	0.2429	0.5214	0.6175	0.4190
最新性・安定性	0.6614	0.2129	0.7315	0.7708
アクセス可能性	0.4649	0.5250	0.2337	0.3418
主観	0.3475	0.5238	0.1271	0.2123

( $p = 0.05$ )

2005年度調査	批判的思考態度尺度因子			
	客観性	探究心	論理的思考	証拠の重視
正確性	0.5182	0.1458	-0.0020	0.4277
目的	0.0109	0.0437	-0.0102	-0.2412
オーソリティ	-0.1837	0.1615	0.3149	0.4765
内容	0.0853	0.3362	0.0322	-0.2045
最新性・安定性	-0.0457	0.0540	0.4906	0.0661
アクセス可能性	0.2823	0.0801	-0.4044	-0.0835
主観	0.1731	0.4094	-0.6063	-0.4211

( $p = 0.05$ )

## 4. 考察

### 4.1 学部学生のWeb情報資源選択時における評価の注目点

被験者である学部学生がWeb情報資源評価の上で最も重視したのが「自分に役立つ情報が得られたか」であったほか、「新しさ」「利用しやすさ」に関連する評価項目に加え、Web情報資源で扱われるテーマやそのレベル、深度を推し量るための評価項目が注目されていた。これらのことから、「課題作成に役立つか」を中心とする評価が行われていることが考えられ

る。つまり、素早く簡単に内容把握や利用ができる情報資源により、課題の解決を目指すという思考傾向が伺える。また、伝統的なメディアにおいては非常に重視されているオーソリティへ注意を払わない傾向も同様に、情報資源への影響かを吟味するよりも、直近の課題解決を優先する意識から発生しているものと考えられる。

### 4.2 Web情報資源評価に対する影響要因

#### 4.2.1 PC, IN, SE利用経験・頻度

PCやインターネットの利用経験が豊かな被

験者や娯楽目的でのインターネットやサーチエンジン利用頻度が高い被験者が Web情報資源選択の際に注目しない傾向が明らかになった。このことから、「PCやインターネット、サーチエンジンの利用経験が豊富である、あるいは頻度の高い被験者もWeb情報資源を評価しない」という仮説は採択されたと言える。つまり、「慣れ」や「情報資源の質を意識しないで構わない環境」という、負の影響がWeb情報資源評価に及ぼされていると考えられる。

また、課題作成目的でのインターネット利用頻度との間の相関は、2005年度調査と2005年度調査では逆の相関が示された。これは、前者が「課題作成目的でインターネットを利用する頻度が高い被験者ほど、Web情報資源の評価を行う」傾向を、後者は「頻度が低い被験者ほどWeb情報資源の評価を行う」傾向を示しているものである。したがって、2005年度調査の被験者は、課題作成に費やす時間的余裕を持ちやすく、評価を行ってからWeb情報資源を利用しようとする学生が多く、逆に2006年度調査の被験者は余裕の持ちにくい学生で構成されていたのではないかと推測される。このことから「課題作成」という探索目的の設定自体がWeb情報資源の評価へ影響を与える要因であると考えられる。

#### 4.2.2 批判的思考態度

特に2006年度調査では、多くの項目に正の相関が示された。さらに、Web情報資源評価全項目平均と批判的思考態度尺度全因子平均間においても正の相関が示された。このことから、批判的思考態度がWeb情報資源評価に影響を及ぼしていることが考えられる。

## 5. 結論

### 5.1 評価項目と重み付け検討の必要性

Web情報資源評価について、学部学生は

「課題の解決に役立つものかどうか」を中心としたWeb情報資源評価を行う傾向にあり、このような特性を反映した評価項目への重み付けの検討を行う必要性が明らかになった。

PCやインターネット、サーチエンジンの利用経験・頻度、批判的思考態度ともにWeb情報資源評価に対する影響の可能性が示された。したがって、PC等の利用経験が豊かな学生の慣れによる影響、および批判的思考に基づいた態度・行動の乏しさによる影響に対するケアを検討する必要があると考えられる。

### 5.2 本調査の限界と今後の展望

本調査では、Web情報資源の評価に関する授業後期間を経て調査を行ったことや、「課題作成を通してWeb情報資源を収集した体験」を思い起こさせながら回答をさせたこと、設問が多いために被験者が適切な回答の記入を放棄した可能性があることから、実際の行動が回答に反映されていない可能性が考えられる。また、自分の行動を肯定的に捉えやすい被験者と否定的に捉えやすい被験者、および両端の回答選択肢を選択する傾向のある被験者と中央部分の回答選択肢を選択する傾向のある被験者が存在し、個人の情緒的特性が回答に反映されている可能性が考えられる。

今後は実際のWeb情報資源を使用した探索行動の観察等を用いて、本調査の補完を行う。さらに次に挙げる調査を行い、学部学生の視点を反映させたWeb情報資源評価項目および項目への重み付けの検討を進める予定である。

- ・司書課程履修者以外の学生を対象とする調査
- ・課題作成以外の評価体験を前提とする調査
- ・異なる属性の学生を対象とする調査
- ・中等教育における教科「情報」学習後の学生を対象とする調査
- ・日常使用言語以外のWeb情報資源の評価傾向（外国語Web情報資源評価傾向把握のため）

本論文は、第53回日本図書館情報学会、三田図書館・情報学会合同研究大会および第54回日本図書館情報学会において発表した内容を基に構成されたものである[13][14]。

**[謝辞]**

本論文執筆にあたり、懇切なるご指導とご助言を下さいました愛知淑徳大学文学部図書館情報学科の菅野育子教授に心より御礼申し上げます。

**[参考文献]**

- 1) Giles, Jim. Internet encyclopaedias go head to head. Nature [online] vol.438, no. 7070, p.900-901, 2005 [cited : 2006-11-12] Available from World Wide Web : <<http://www.nature.com/nature/journal/v438/n7070/full/438900a.html>> .
- 2) Encyclopædia Britannica, Inc. Fatally Flawed : Refuting the recent study on encyclopedic accuracy by the journal Nature [online]. Chicago, 2006 [cited : 2006-11-12]. Available from World Wide Web : <[http://corporate.britannica.com/britannica\\_nature\\_response.pdf](http://corporate.britannica.com/britannica_nature_response.pdf)> .
- 3) Rothenberg, David. How the Web destroys student research papers. Education Digest. vol.63, no.6 , 1998, p.59-61.
- 4) 坂元章ほか. コンピュータ使用と子供の論理性・創造性の発達に関するパネル研究. 日本教育工学会誌. vol.22, Suppl., 1998, p.65-68.
- 5) 伊藤沙耶; 櫻木貴子. サーチエンジンを用いた大学生の情報検索過程の実験調査：事前検索経験の影響と情報源の評価を中心に. Journal of Library and Information Science. vol.16, 2003, p.17-26.
- 6) Grimes, Deborah J. ; Boening, Carl H. Worries with the Web : A look at student use of Web resources. College and Research Libraries. vol.62, no.1, 2001, p.11-23.
- 7) Aula, Anne ; Nordhausen, Klaus. Modeling Successful performance in Web searching. Journal of the American Society for Information Science and Technology. vol.57, no.12, 2006, p.1678-1693.
- 8) Fitzgerald, Mary Ann. The cognitive process of information evaluation in doctoral students : a collective case study. Journal of Education for Library and Information Science. vol.41, no.3, 2000, p.170-186.
- 9) 平山るみ; 楠見孝. 批判的思考態度が結論導出プロセスに及ぼす影響：証拠評価と結論生成課題を用いての検討. 教育心理学研究. vol.52, no.2, 2004, p.186-198.
- 10) 櫻木貴子. 電子的情報源の評価基準：大学図書館におけるWeb情報源の評価基準の比較. 2001年度日本図書館情報学会春季研究集会発表要綱. 2001, p.55-58.
- 11) 四谷あさみ. 情報リテラシー教育改善のためのウェブサイトの質に対する評価尺度の開発と検証. 愛知, 愛知淑徳大学大学院, 2003, 176p. 愛知淑徳大学大学院図書館情報学専攻修士論文.
- 12) 四谷あさみ; 野添篤毅. 調べる目的で利用するウェブサイト情報源に対する評価尺度の妥当性と信頼性の検証. 2003年度日本図書館情報学会春季研究集会発表要綱. 2003, p.75-78.
- 13) 櫻木貴子. 学部学生へのWeb情報源評価に影響を与える要因. 第53回日本図書館情報学会, 三田図書館・情報学会合同研究大会要綱. 2005.
- 14) 櫻木貴子. Web情報源評価における学部学生の着目点. 第54回日本図書館情報学会

研究大会要綱. 2006.